



新型コロナウイルス感染者の 皮疹対応を考える

診療の開始、会計手続きの一部変更、各種検査や手術の制限など診断13日後までと様々で、所見は中毒疹様、蕁麻疹様、凍瘡様、紫斑など多様である。そのほとんどは10日以内に消失するようで、感染の重症度と皮膚症状の関連は不明である。

診察する機会があった。皮膚科的には典型的な力ポシ水痘様発疹(皮膚への単純ヘルペスウイルス感染症、しばしば高熱を伴う)も、高熱および皮疹でCOVID-19の可能性が否定できないので、他科からの紹介で皮膚科受診となった男性患者をエプ診療の積極的な推奨が必要な時代が来ているのかもしれない。

若干下火になったとはいえ、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的な蔓延が続いている。本稿を執筆中の今、大阪府でもまだ緊急事態宣言が発令中である。

全国の他の主幹病院同様、当大学附属病院でも救急医療部、総合診療科が前面に立ったCOVID-19疑い患者への対応に日々追われ、COVID-19以外

最近、COVID-19患者に、ウイルス感染に関連するとされる様々な皮膚症状が生じることが報告されてき

たが、COVID-19にみられたと報告さ

れられている皮膚症状は薬疹、膠原病、皮膚血管炎など、COVID-19とは無関係に皮膚科診療ではしばしば経験するものである。先日、各医療施設内でも、高熱および皮疹でCOVID-19の可能性が否定できないので、他科からの紹介で皮膚科受診となった男性患者をエプ診療の積極的な推奨が必要な時代が来ているのかもしれない。

大阪医科大学医師会長

森脇 真一

— 1289